

前号を読んで

附属学校と大学

林謙一郎

生命環境科学研究科教授

筑波大学に赴任して2年2ヶ月が過ぎた。前任地の大学と筑波大学とでは、組織や制度が大きく異なり、赴任当初はカルチャーショックを受けて戸惑っていたが、その10ヶ月後に専攻長を拝命した後は急速に慣れて、普通の筑波大学の教員になったと思っている。前号には特集「現場から④附属学校教育局・共同教育研究施設」で、各センターの概要が紹介されており、新参者の私にとっては未知の情報が多く、有意義な内容であった。センターのうちいくつかは、普段から馴染の深い施設ではあるが、それにしても大学全体でこれほど多くの附属センターがあることに改めて驚いた。附属学校が11校もあることも知らなかった。

高沢附属高等学校副校長による提言は特に印象に残った。50年以上前に建てられ、老朽化が著しい校舎の状況を切実に訴えておられる内容である。そのような施設・設備面からみれば劣悪な環境で、公立高校や

私立高校と競い合い優秀な学生を確保・輩出して実績を挙げて来られたのは教員の努力によるところが大きいように思う。提言の中にはすぐにでも改善できそうな事項が含まれているので、今後良い方向に進むことを希望する。

また今春実施された、附属駒場中学生による筑波大学見学会の話題も掲載されていた。我々の専攻にも3名の中学生が見学に訪れた。事前に見学の受け入れを表明しテーマを設定していたにもかかわらず、中学生に興味を持ってもらえずに「見学希望者無し」の分野が多くあった中で、わずか3名ではあるが見学者が来てくれたことに感謝している。見学会では1時間半程度の短い時間しかなかったが、大学院生にポスターを使って自分達の研究が如何に面白いかを分かりやすく(?)説明してもらうこととした。見学者にはある程度満足して帰ってもらえたと思っている。また大学院生は事前の準備にも関わらず、専門外の人に研究の内容をやさしく説明する事が難しいことに困惑したようであった。見学会は中学生および大学院生の双方にとって良い機会であった。附属学校と大学との関係はこれまでは希薄であったのだろうが、新たな段階に来ているように思う。教育の現場で新しく始まった試みの今後の展開に期待する。(はやし けんいちろう/資源地質学)